

## 「蓄蔵貨幣の第一形態」について

小 林 威 雄

### 一

『資本論』第三卷第四篇第十九章貨幣取扱資本のなかにつぎのような文章がある。

「資本制的生産過程ならびに商業一般——先資本制的生産様式のもとでさへもの——から、つぎのものが生ずる。第一に、蓄蔵貨幣としての貨幣の集積、すなわち、今日では資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならない部分の、支払手段および購買手段の準備金としての集積。これは蓄蔵貨幣の第一形態であって、資本制的生産様式のもとで再現し、また総じて商業資本が発展すれば少くとも商業資本のために形成される。いずれも、国内的流通にも国際的流通にも妥当する。この蓄蔵貨幣はたえず流動するのであって、たえず流通に流れこみ、たえず流通から帰ってくる。つぎに、蓄蔵貨幣の第二形態は、貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態であって、新たに蓄積された未投下貨幣資本もこれにぞくする。この貨幣蓄蔵そのものによって必要となる機能は、さしあたり、その保管、簿記などである。

だが第二に、これと結びついたものとして、購買による貨幣の支払、販売による貨幣受取、支払金の支払および受領、支払の決済、など。すべてこれらのことを、貨幣取扱業者はさしあたり、商人や産業資本家たちのための単純な

金庫業者としておこなう」(『資本論』第三卷、S.350、長谷部訳、青木版四五三ページ)。

この文章は、「資本制的生産過程ならびに商業一般——先資本制的生産様式のもとでさえもの——から」生ずる二つの事柄についてのべている。この二つの事柄のうち、われわれの問題にとって関係のあるものは第一の事柄である。そして、この第一の事柄についてのべている文章は、資本制生産のもとにおける貨幣蓄藏ないし蓄藏貨幣を研究する場合の一つの重要な典拠となっている。

さて、マルクスは、この文章の「第一」において資本制生産のもとにおいて形成される蓄藏貨幣を二つの形態に、すなわち、「蓄藏貨幣の第一形態」と「蓄藏貨幣の第二形態」とに区分して、それぞれの形態における蓄藏貨幣について述べている。したがって、われわれは、資本制生産のもとにおいて形成される蓄藏貨幣は、「蓄藏貨幣の第一形態」と「蓄藏貨幣の第二形態」との二つの形態において考察しなければならないのであるが、ここでつぎのような問題が生ずる。すなわち、資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣は、なぜ、「蓄藏貨幣の第一形態」と「蓄藏貨幣の第二形態」との二つの形態に区分して考察しなければならないのか、さらに、資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣の「蓄藏貨幣の第一形態」と「蓄藏貨幣の第二形態」とへの区分は、どういう根拠にもとづいてなされるのか、という問題である。このような問題は、マルクスによつてはとくにとりあげられていないから、この問題についての直接的な叙述はあたえられていない。しかし、資本制生産のもとにおける貨幣蓄藏ないし蓄藏貨幣を研究する場合には、この問題をあきらかにすることがとくに重要であるように思われる。

では、このような問題の解決に接近するためにはどのように考察をすすめていけばよいであろうか。われわれは、さしあたり、「蓄藏貨幣の第一形態」および「蓄藏貨幣の第二形態」という資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣の二つ

の形態をそれぞれ個別的に考察して、それぞれの形態における蓄蔵貨幣の形成される契機、それぞれの目的、役割などを把握して両者の相異点、共通点をあきらかにすることからはじめよう。そこで、さきの文章においてのべられていることを整理してみるとつぎのようになる。

(一) 「蓄蔵貨幣の第一形態」について

(1) 「蓄蔵貨幣の第一形態」とは、支払手段および購買手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならない部分」である。

(2) 「蓄蔵貨幣の第一形態」は、「資本制的生産様式のもとで再現し、また総じて商業資本が発展すれば少くとも商業資本のために形成される」。

(3) そして、(2)のことは「いずれも、国内的流通にも国際的流通にも妥当する」。

(4) 「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「たえず流動するのであって、たえず流通に流れこみ、たえず流通から帰ってくる」。

(二) 「蓄蔵貨幣の第二形態」について

(1) 「蓄蔵貨幣の第二形態」は、「貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態」である。

(2) 「新たに蓄積された未投下貨幣資本」は、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくする。

以上のように、さきの文章においては、「蓄蔵貨幣の第一形態」にかんしては四つの点が、また、「蓄蔵貨幣の第二形態」にかんしては二つの点がのべられている。しかし、その説明は、みられるとおり、きわめて簡単であり、要約されたかたちでなされている。のべられていることをただ表面的にみただけでは、「蓄蔵貨幣の第一形態」および「蓄

藏貨幣の第二形態」を充分に理解し、把握したことにはなりえないであろう。というのは、ここでのべられていることの内容をさらに理解していなければならないからである。たとえば、「蓄藏貨幣の第一形態」についていえば、その(1)において「蓄藏貨幣の第一形態」についての研究にもっとも重要な規定であるところの、「蓄藏貨幣の第一形態」とは、支払手段および購買手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならない部分」であるという規定はあたえられているけれども、この規定を理解するためには、なぜ、資本はその一部分を支払手段および購買手段の準備金としてつねに貨幣形態において現存していなければならないのか、ということをおきらかにし、理解していなければならないであろうし、また「蓄藏貨幣の第二形態」についていえば、その(1)において「蓄藏貨幣の第二形態」は、「貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態」である、という「蓄藏貨幣の第二形態」についての重要な規定はあたえられているが、しかし、この規定を理解するためには、この「貨幣形態で遊休し目さき失業している資本」は、<sup>(1)</sup>どういう契機にもとづいて形成されるのか、そして、それは具体的にどのような目的をもって存在しているのか、というようなことを把握していなければならないであろう。

そこで、われわれは、ここでのべられている諸点を充分に理解するために、さらに「蓄藏貨幣の第一形態」および「蓄藏貨幣の第二形態」についての考察をふかめなければならないことになる。

(1) さきの文章においては、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくするもの一つとして「新たに蓄積された未投下貨幣資本」があげられている。

ところで、資本制生産のもとにおける蓄藏貨幣にかんするこの「蓄藏貨幣の第一形態」および「蓄藏貨幣の第二形態」という明確な区別は、『資本論』第三巻のさきに引用した文章においてのみみうけられるにすぎず、『資本論』の

全巻にわたって他の箇所においてはまったくおこなわれていない。だから、言葉にとらわれると、『資本論』の他の箇所においては、「蓄蔵貨幣の第一形態」および「蓄蔵貨幣の第二形態」についての叙述は存在しないということになってしまふ。しかし、言葉にとらわれず、さきの「蓄蔵貨幣の第一形態」および「蓄蔵貨幣の第二形態」についての簡単な諸規定にもとづいて内容的に考察してみると、『資本論』の他の箇所においても「蓄蔵貨幣の第一形態」および「蓄蔵貨幣の第二形態」についての叙述をみいだすことができる。<sup>(2)</sup>これらの箇所は、したがって、「蓄蔵貨幣の第一形態」および「蓄蔵貨幣の第二形態」についての考察をふかめていく場合に重要な手がかりをあたえてくれるわけである。

本稿においては、資本制生産のもとにおける蓄蔵貨幣の二つの形態のうちの「蓄蔵貨幣の第一形態」について考察をすすめていくことにする。しかし、さきの「蓄蔵貨幣の第一形態」についての諸規定のうち(2)および(3)はいずれも特殊問題に関連するものであると思われるので、本稿においては、(1)「蓄蔵貨幣の第一形態」とは、支払手段および購買手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現存しなければならない部分」である、という規定および(4)「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、「たえず流動するのであって、たえず流通に流れこみ、たえず流通から帰ってくる」、という規定の二つの規定について考察する。<sup>(3)</sup>

まず、『資本論』の他の箇所において、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣についてどのようにのべられているか、ということからはじめよう。

(2) 「蓄蔵貨幣の第一形態」については本稿においてとりあげられるので、ここでは、「蓄蔵貨幣の第二形態」について『資本論』の他の箇所においてどのようにのべられているか、二、三引用しておこう。

「蓄蔵貨幣の第一形態」について

(1) 本文において引用した文章のなかで、「蓄蔵貨幣の第二形態」にぞくするものとしてしめされている「新たに蓄積された未投下貨幣資本」について

「生産過程を拡大するための諸比率は、恣意的なものでなく、技術的に指定されているのであるから、実現された剰余価値は、資本化されるはずではあっても、しばしばいくつもの循環の反復によってはじめて、現実に追加資本として機能しうる——または過程的資本価値の循環にはいりこみうる——大きさにたつことが出来る（だからそれまで積立ておかれねばならない）。だから剰余価値が麻痺して蓄蔵貨幣となり、この形態で潜在的貨幣資本を形成する。潜在的というのは、けだし、貨幣資本は貨幣形態にとどまるあいだは資本として作用しえないからである。かくしてここでは、貨幣蓄蔵は、資本制的蓄積過程にふくまれる・この過程にともなう・だが同時に本質的にはこの過程から区別される・一契機として現象する。なぜならば、潜在的貨幣資本の形成によっては再生産過程そのものは拡大されないからである。逆である。潜在的貨幣資本がここで形成されるのは、資本制的生産者が生産の規模を直接には拡大しえないからである」（『資本論』第二卷、S. 334、長谷部訳、青木版一〇三ページ）。

「g自身の機能は、gがその能動的機能に必要な最小限の大きさ——gが現実に貨幣資本・この場合では機能しつつある貨幣資本Gの蓄積部分・として一緒に貨幣資本の機能にはいりこむに必要な大きさ——にたつするに十分な追加を価値増殖循環の反復つまり外部から受取るまで貨幣状態にとどまる、ということである。それまでのあいだgは積立てられて、形成過程にある増大中の蓄蔵貨幣の形態でのみ実存する。だからこの場合には、貨幣蓄積、貨幣蓄蔵は、現実の蓄積——産業資本の作用する規模の拡張——に一時的にともなう過程として現象する。一時的というのは、けだし、蓄蔵貨幣は蓄蔵貨幣状態にとどまるかぎりには資本として機能せず、価値増殖過程に参加せず、一の貨幣額——その助力をまたずに現存する貨幣が同じ金庫に投入れられるがゆえにのみ増大する一の貨幣額——たるにとどまるからである。

蓄蔵貨幣の形態は、流通していない貨幣の形態、流通を中断され、したがって貨幣形態でたくわえられる貨幣の形態にほかならない。貨幣蓄蔵そのものの過程についていえば、これはすべての商品生産に共通であって、これが自己目的としての役割を演ずるのは、未発展な先資本制的商品生産形態のもとでにすぎない。ところがここでは、蓄蔵貨幣が貨幣資本の形態として現象し、貨幣蓄蔵が資本蓄積に一時的にともなう過程として現象する。〔前者が然るのは〕貨幣はここでは潜在的貨幣資本としてあらわれるからであり、またそのかぎりにおいてである。〔後者が然るのは〕貨幣蓄蔵、すなわち貨幣形態で現存する剰

余価値の蓄蔵貨幣状態は、現実に機能する資本への剰余価値の転形のための、資本循環の外部でおこなわれる機能的に規定された準備段階だからである。だから蓄蔵貨幣は、そのこうした規定によって潜在的貨幣資本なのであり、またそれゆえにこそ、それが過程にはいりこむためにたつていなければならない大きさが生産資本のその時々価値構成によって規定されているのである。だが、それが蓄蔵貨幣状態にとどまるあいだは、それはまだ貨幣資本としては機能せず、まだ遊休貨幣資本である。といつても、以前のように機能を中断された貨幣資本ではなく、まだ機能をはたす能力のない貨幣資本である」(同上、S.79~80、一〇〇~一〇一ページ、〔〕内は訳者)。

「たとえば、資本家Aが一年間または多年間にわたり、彼が継起的に生産しただけの商品生産物を売るならば、それによつて彼は、商品生産物のうち剰余価値の担い手たる部分——剰余生産物——をも、つまり彼が商品形態で生産した剰余価値そのものをも、継起的に貨幣に転形してつぎつぎに積立てるのであり、かくして潜在的な新貨幣資本が形成される。ここに潜勢的というのは、生産資本の諸要素に転態されるべき、その能力および使命のゆえにある。だが、事実に彼は単純な貨幣蓄蔵をおこなうだけであつて、これは現実的再生産の要素ではない」(同上、S.465~6、六四四~五ページ)。

(2)「貨幣形態で遊休し目さき失業している資本の形態」である固定資本の減価償却基金について

「ここに問題とする場合では、ある大資本家の手に蓄蔵貨幣として大量的に積立てられているはずの貨幣が、固定資本の購入にさいして一挙に流通に投入せられる。この貨幣そのものはふたたび流通手段および蓄蔵貨幣として社会内で配分される。固定資本の磨損に応じてその価値を出発点に還流させる償却基金によつて、流通貨幣の一部分が、ふたたび、長かれ短かれの期間、同じ資本家——その蓄蔵貨幣が固定資本の購入にさいして流通手段に転形してはなれなかったその同じ資本家——の手もとで蓄蔵貨幣を形成する。これは、流通手段として機能したり、ついではまた蓄蔵貨幣として流通貨幣分量から分離されたりしながら、社会に実存する蓄蔵貨幣のたえず変化する配分である」(『資本論』第二巻、S.177、長谷部訳、青木版二三四ページ)。

「固定資本は、その全価値量が一挙に投下されて、幾年間にもわたり継続的にその価値が流通からひきあげられるのであり、したがつて、固定資本は、年々の貨幣蓄蔵……によつて漸次的に貨幣形態で再建される」(同上、S.484、六二九ページ)。

(3) したがつて、本稿においては、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣を形成する貨幣蓄蔵には、貨幣の種々の純技術的な諸操作が必要であるということ、この貨幣の種々の純技術的な諸操作をおこなうことを特殊な事業とする貨幣取扱業が発

生すると、これにともなつて「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣が、貨幣取扱業者に集中されるということ、貨幣取扱業者は、同時に「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣を経済的最小限に縮小するための技術的手段を提供し、貨幣取扱業者の手もとに、現実に「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣として機能しない蓄藏貨幣が存在するようになるということ、貨幣取扱業者は、ただ貨幣の種々の純技術的な諸操作をおこなうだけであるから、現実に「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣として機能しない蓄藏貨幣は、貨幣取扱業者の手もとでたんに保管されているにすぎないということ、しかし、銀行は、一方で貨幣取扱業務をおこない、他方で「貨幣の借入と貸付」という特殊な業務をおこなうので、マルクスが「銀行は産業資本家たちの金庫業者（貨幣取扱業者——引用者）であるから、それぞれの生産者や商人が準備金として保有する貨幣資本、または支払金としてかれの手もとに流れてくる貨幣資本が、銀行の手に集積する。この準備金はかくして貸付可能な貨幣資本に転形する。このようにして、商業世界の準備金が——共同準備金として集積するがゆえに——必要な最小限に制限されるのであつて、さもなくば準備金として仮睡するはずの貨幣資本の一部分が貸出され、利子生み資本として機能する」（『資本論』第三卷、S. 439、長谷部訳、青木版五七二ページ）とのべているように、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、銀行に集積され、そして経済的に必要な最小限に縮小され、かくして「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣の一部分が銀行によって貸出され、利子生み資本として機能するということ、などについてもとりあつかわれていない。

## 二

第一節についてのべたように、「蓄藏貨幣の第一形態」という規定がおこなわれているのは、『資本論』第三卷第四篇第十九章貨幣取扱資本のなかの第一節において引用した箇所のみである。しかし、この箇所における簡単な諸規定にもとづいて内容的に考察してみると、『資本論』の他の箇所においても、この「蓄藏貨幣の第一形態」について述べられていることがわかる。本節においては、この「蓄藏貨幣の第一形態」についてかなりくわしく説明している二つの文章を引用して検討してみよう。

（一）「Gが貨幣資本・生産資本に再転形すべき資本価値・としての自己の機能をはたすためにみずからを転態する



商品  $P_m$  および  $A$  が、期限をことにして購買され、または支払われねばならぬとすれば、つまり  $G-W$  が一列の継起的におこなわれる購買および支払をあらわすとすれば、 $G$  の一部分は  $G-W$  という行為をなしとげるが、他の一部分は貨幣状態にとどまり、過程そのものの諸条件によって規定された、ある時期にはじめて同時的または継起的な  $G-W$  という諸行為のために役立つのである。この部分は、一定の時点に行動を開始してその機能をはたすために、一時的にのみ流通からひきあげられているのである。その場合には、この部分のかかる貯蔵は、それ自体、その流通によって且つ流通のために規定された機能である。購買および支払準備金 (*Kauf- und Zahlungsfonds*) としてのその存在、その運動の停止、その流通中断の状態は、貨幣が貨幣資本としてのその諸機能の一つをおこなうところの一状態である。貨幣資本としてのといったが、この場合には、一時的に休息状態にある貨幣そのものは、貨幣資本  $G$  ( $G-W$  Ⅱ  $G$ ) —— 循環の出発点である生産資本の価値  $P$  に等しい商品資本の価値部分 —— の一部分だからである。他面、流通からひきあげられた貨幣はすべて蓄蔵貨幣形態にある。したがって、ここでは、貨幣の蓄蔵貨幣形態が貨幣資本の機能となるのであって、それはあたかも、 $G-W$  では購買手段または支払手段としての貨幣の機能が貨幣資本の機能となるのとまったく同様であり、しかも、それは、資本価値がここでは貨幣形態で実存し、貨幣状態がここでは循環の関連によって指定された産業資本 —— その諸段階の一つにおける —— の一状態だからである。だが、ここではまた、同時に、貨幣資本は産業資本の循環の内部では貨幣機能以外の機能をおこなうものではなく、そしてこの貨幣機能は、この循環の他の諸段階との関連によってのみ同時に資本機能の意義をもつ、ということが証明される」(『資本論』第二巻、S. 72~3、長谷部訳、青木版一〇一~一二ページ)。

この文章は、『資本論』第二巻第一篇第二章生産資本の循環 第一節単純再生産のなかにある文章である。

この文章は、「 $G$ が貨幣資本・生産資本に再転形すべき資本価値・としての自己の機能をはたすためにみずからを転態する商品  $P_m$  および  $A$  が、期限をことにして購買され、または支払われねばならぬとすれば、つまり  $G - W$  が一列の継起的におこなわれる購買および支払をあらわすとすれば、……」(傍点——引用者)となっており、このような条件のもとで論述をすすめている。したがって、この文章によっては、貨幣資本の生産資本への再転形が、なぜ継起的におこなわれなければならないのか、さらに、資本は、なぜその循環運動の一段階において、つねにその一部分を購買手段および支払手段の準備金として貨幣形態において現存していなければならないのか、という必然性をあきらかにすることはできない。いいかえれば、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣が、資本の循環運動にふくまれているいかなる必然性にもとづいて、つねに形成され、現存していなければならないのか、ということ、この文章によってはあきらかにすることはできない。

しかし、この文章は、購買手段および支払手段の準備金として一時的に流通からひきあげられて休息状態にとどまっている貨幣についてのべており、そして、この貨幣がここではたんなる貨幣ではなく、産業資本の循環の他の諸段階との関連によって規定されている貨幣資本であるとのべており、さらに、購買手段および支払手段の準備金として一時的に流通からひきあげられている貨幣が蓄蔵貨幣形態にあり、ここではこの貨幣の蓄蔵貨幣形態が貨幣資本の機能となるのべていることから、この文章においてのべられていることは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣についてであると考えられる。

貨幣資本  $G$  は、商品資本  $W$  が貨幣資本  $G$  に転形され、この  $G$  から剰余価値部分  $g$  をさしひいた資本価値である。つまり、貨幣資本  $G$  は  $W - G$  の結果にほかならない。そして、この貨幣資本  $G$  は、生産資本に再転形すべき資本価値で

ある。したがって、この貨幣資本としての資本の定在は、この運動においては消滅的な契機であるにすぎず、貨幣資本の機能は、商品資本から生産資本への再転形を媒介するにすぎない。

この文章においては、さきにのべたように、貨幣資本の生産資本への再転形が時期をことにして継起的におこなわれるものとすれば、というようにのべられているが、しかし、貨幣資本の生産資本への再転形が時期をことにして継起的におこなわれるということは、たんなる例外的な場合においてのみではない。生産過程を連続的におこなうためには、資本はつねに生産手段( $P_m$ )の生産的な在荷を充分に準備しておかなければならないが、この在荷・潜在的生产資本は、資本の労働過程において使用される生産手段のそれぞれの諸要素によってあいことなる一定の更新期間をもっている。したがって、生産手段のそれぞれの諸要素は、あいことなる一定の更新期日に購買され、補充される。

つまり、 $G - P_m$ は、必然的にあいことなる時期におこなわれる諸購買に分裂する。また、労働力( $A$ )の購買についてみれば、労働力という特殊な商品は、その性質上在荷されることはありえないし、しかも、労働者には特定の短期間ごとに賃銀を支払わなければならない。 $G - A$ は、一定の支払期日ごとにおこなわれる。このように、貨幣資本の生産資本への再転形、つまり  $G - W \setminus P_m A$  という行為は、時期をことにして継起的におこなわれる。したがって、貨幣資本の生産資本への再転形は、資本の循環過程そのものの諸条件にもとづいて時期をことにして継起的におこなわれなければならないのである。なぜ、貨幣資本の生産資本への再転形が時期をことにして継起的におこなわれなければならないのか、ということは、価値増殖過程である生産過程を連続的におこなうためであり、資本がつねに資本であるがためである。貨幣資本の生産資本への再転形は、このように時期をことにして継起的におこなわれるが、他方、商品資本( $W'$ )の貨幣資本( $G'$ )への転形もまた時期をことにして継起的におこなわれる。したがって、 $W' - G'$ の結果とし

て生産資本に再転形すべき貨幣資本は、たえず継起的に形成されてくる。こうして貨幣資本を構成する個々の貨幣片はたえず変動しながらも、資本は、その循環運動の一段階において、つねにその一部分を貨幣資本の形態において現存していなければならないのである。なお、この問題については、さらに第三節において考察する。

ところで、貨幣資本は、貨幣の諸機能をはたしうるだけであって、他のなんらの機能をもはたすことはできない。それは、貨幣であつて、たんなる商品でもなく、また生産をおこなうための諸要素でもない。この貨幣が貨幣資本となるのは、それが、資本の循環の関連によつて規定されている諸段階の一つの状態であるからである。だから、貨幣資本の諸機能は、貨幣資本が資本であるということから生ずるのではなく、それが貨幣であるということから生ずるのである。貨幣の諸機能は、資本の循環における他の諸段階との関連によつてのみ同時に資本機能であるのである。

貨幣資本の生産資本への再転形は、 $G \begin{array}{c} \diagup \\ W \\ \diagdown \end{array} \begin{array}{c} Pm \\ A \end{array}$ という行為によつておこなわれる。この再転形は、いまのべたように、資本の循環過程そのものの諸条件にもとづいて時期をことにして継起的におこなわれる。 $G \begin{array}{c} \diagup \\ W \\ \diagdown \end{array} \begin{array}{c} Pm \\ A \end{array}$ という行為

をおこなうときには、貨幣資本は、購買手段あるいは支払手段という貨幣の機能をおこなう。そして、貨幣資本は生産資本に再転形され、貨幣資本の形態をぬぎすてる。貨幣資本の形態において存在する資本価値は、購買手段あるいは支払手段として能動的に機能しないで貨幣状態にとどまっている。しかし、それは、生産資本に再転形されるべき資本価値であり、生産資本への再転形を準備している段階にある。それは、資本の循環過程そのものの諸条件によつて規定された一定の時期に購買手段として、あるいは支払手段として機能し、生産資本に再転形される。しかし、それはその時期にいたるまでのあいだは、一時的に流通からひきあげられており貨幣状態において休息している。ところでこの貨幣状態において一時的に流通からひきあげられている貨幣資本は、購買手段として、あるいは支払手段として

流通にはいることを準備しているのであるから、それは購買手段および支払手段の準備金として存在している。しかし、購買手段および支払手段の準備金といっても、ここでは、それは、単純な商品流通のもとにおけるたんなる購買手段および支払手段の準備金ではない。というのは、ここで購買手段および支払手段の準備金として存在する貨幣は、貨幣資本として機能しているからである。

さて、購買手段および支払手段の準備金として貨幣状態にとどまって休息している貨幣は、一時的にせよ流通からひきあげられている。「流通からひきあげられた貨幣はすべて蓄蔵貨幣形態にある」のであるから、それは蓄蔵貨幣の形態にある。ところで、いまのべたように、ここでの購買手段および支払手段の準備金は、単純な商品流通のもとにおけるたんなる購買手段および支払手段の準備金ではなく、ここでの購買手段および支払手段の準備金として存在している貨幣は、貨幣資本として機能している。したがって、ここで購買手段および支払手段の準備金として一時的に流通からひきあげられている貨幣が蓄蔵貨幣の形態にあるといっても、それはたんなる蓄蔵貨幣ではなく、貨幣資本として機能している蓄蔵貨幣である。貨幣資本は、貨幣の諸機能をはたすことができるだけであって、他のなんらの機能をもはたすことはできない。 $G \swarrow \searrow PmA$ という行為においては、貨幣資本は、購買手段あるいは支払手段という貨幣の機能をはたす。このことと同様に、ここでは、貨幣資本は蓄蔵貨幣という貨幣の機能をはたすのである。これらの貨幣の諸機能が、貨幣資本の諸機能となるのは、資本の循環の他の諸段階との関連においてのみである。

しかし、さきの文章においては、購買手段および支払手段の準備金として貨幣状態において機能している貨幣資本は蓄蔵貨幣の形態にあるということはこのべられているが、それが「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であるというようには規定されていない。けれども、はじめにのべたように、さきの文章においてのべられていることは、

あきらかに「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣についての叙述であると考えられるので、さきの文章における「蓄藏貨幣」は、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣の意味である、と理解しなければならない。

購買手段および支払手段の準備金として一時的にせよ流通からひきあげられて休息状態におかれている貨幣は蓄藏貨幣の形態にある。しかし、ここでの蓄藏貨幣はたんなる蓄藏貨幣ではなく、生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能している。このように、資本の循環過程において生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能している蓄藏貨幣が、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣である。

「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、貨幣資本として、つまり生産資本に再転形すべき資本として機能しているのであるから、それは資本の循環過程そのものの諸条件によって規定された一定の時期にたえず継起的にいついで購買手段として、あるいは支払手段として流通にはいる。他方、それはW—Gの結果としてたえず継的に一時的に流通からひきあげられて形成される。だから、それは、それを構成する個々の貨幣片をたえずかえながらもつねに存在する。第一節において引用した文章のなかでは、「蓄藏貨幣の第一形態」についてのさいごのところ、このことをつぎのようにのべている。「この蓄藏貨幣はたえず流動するのであって、たえず流通に流れこみ、たえず流通から帰ってくる」と。したがって、この「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣を形成する貨幣蓄藏は、「流通によって且つ流通のために規定された」貨幣蓄藏であり、「流通のためおよび流通によって条件づけられた貨幣蓄藏」(『資本論』第二巻、S. 344 長谷部訳、青木版四四八ページ)である。

ところで、さきの文章のなかで、とくに「G—W」が一系列の継起的におこなわれる購買および支払をあらわすとすれば、Gの一部分はG—Wという行為をなしとげるが、他の一部分は貨幣状態にとどまる」と、というところを読むと

き、われわれは、『経済学批判』の第二章三貨幣(a)貨幣蓄藏の項の第一バグラフのなかの、つぎのような文章を思いだす。

「流通  $W-G-W$  では、第二環  $G-W$  は、同時にはおこなわれないで時間的にあいづらいでおこなわれる一列の購買に分裂するのであるから、 $G$  の一部分は鑄貨として流通するのに、他の部分は貨幣として休息する。貨幣は、実際この場合には、ただ一時流通を停止した鑄貨(鑄貨準備金——引用者)にすぎないのであって、流通する鑄貨総量の個々の構成部分は、あるときは一方の形態であるときは他方の形態で、つねにいれかわってあらわれるのである」(『批判』S.119)。そこで『批判』の文章と『資本論』の文章とを比較して検討してみよう。

(1) 『批判』における  $G-W$  は、たんなる購買をあらわしているにすぎず、たんなる貨幣の商品への転形をあらわしているにすぎない。『資本論』における  $G-W$  は、たんなる購買をあらわしているのではなく、「労働力という特殊な商品」および生産手段の購買をあらわしている。すなわち、 $G-W \searrow PmA$  である。したがって、『資本論』における  $G-W$  は、貨幣資本の生産資本への転形をあらわしている。

(2) 『批判』においては、「 $G$  の一部分は鑄貨として流通する」、つまり流通手段として流通するが、『資本論』においては、 $G-W$  が「一列の継起的におこなわれる購買および支払をあらわす」のであるから、 $G-W$  という行為をなしとげる  $G$  の一部分は、購買手段として、あるいは支払手段として流通する。

(3) 『批判』における貨幣として休息している  $G$  は、「鑄貨準備金」である。『資本論』における  $G-W$  をかりに購買のみをあらわすものとする、ここで貨幣状態にとどまっている  $G$  は、「購買準備金」つまり購買手段の準備金である。他の諸条件を考えないで、このかぎりにおいて考えれば、「鑄貨準備金」は購買手段の準備金というように

いいあらわされていることになる。しかし、『資本論』における貨幣状態にとどまっているGは、購買手段の準備金のみでなく、「支払準備金」つまり支払手段の準備金でもある。購買手段の準備金が形成される契機と支払手段の準備金が形成される契機とは、前稿および前々稿（支払手段の準備金について、『立教経済学研究』第十三巻、第二号所載、「鑄貨準備金」について、同上、第十二巻、第二号所載）においてのべたようにあいことなっている。だが、いずれも一時的に流通からひきあげられて休息状態におかれている。『資本論』においては、この点にもとづいて購買手段の準備金と支払手段の準備金とを包括しているのである。

したがって、『批判』における貨幣として休息しているGは、「鑄貨準備金」であり、『資本論』における貨幣状態にとどまっているGは、購買手段および支払手段の準備金であって、ともに休息状態におかれているGではあるが、その内容は『批判』と『資本論』とではあいことなっている。

(4) 『批判』においてGであらわされているものは、たんなる貨幣であるが、『資本論』においてGであらわされているものは、たんなる貨幣ではなくして生産資本に転形すべき貨幣資本である。したがって、『批判』においてのべられている休息状態におかれているGは「鑄貨準備金」であり、それはたんなる購買手段の準備金であるにすぎず、『資本論』においてのべられている休息状態におかれているGは、購買手段および支払手段の準備金ではあるが、たんなる購買手段および支払手段の準備金ではなく、それは生産資本に転形すべき貨幣資本として機能している。<sup>(4)</sup>

以上(一)の引用文について考察してきたが、はじめにのべたように、この文章においては、なぜ、資本はその一部分をつねに購買手段および支払手段の準備金として貨幣形態において現存していなければならないのか、という問題についてはふれられていない。しかし、購買手段および支払手段の準備金として存在する貨幣が、一時的に流通か



らひきあげられて休息状態におかれており、蓄蔵貨幣の形態にあるということがのべられており、さらに、この蓄蔵貨幣は生産資本に転形されるべき貨幣資本として機能しているということがのべられているので、この文章は、「蓄蔵貨幣の第一形態」についての叙述であると考えるのである。

つぎに、購買手段および支払手段の準備金と資本の循環の攪乱を解決するための準備金との相異をのべ、さらに「準備貨幣資本」(「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣であると考える)についてのべている文章を考察してみよう。

(4) 雑誌『評論』(河出書房)に連載され、のちに単行本として刊行されている向坂逸郎、宇野弘藏編『資本論研究』のなかで久留間教授はつぎのようにのべられている。

「單純な流通の場合に『貨幣の沈澱』——『経済学批判』の言葉でいえば『休職状態の鑄貨』——として、單に形式的な規定のみをもって現われたものは、資本の回転の所では、たえず更新しながら貨幣資本の形態において存在しなければならない資本部分という形で再び現われて来る。そしてこの場合には、その大きさを規定する一定の法則が同時に明かにされるわけになる」(至誠堂版、三七九～三八〇ページ)。

また、遠藤茂雄氏はつぎのようにのべられている。

「この資本のうち常に貨幣形態で存在する部分は、單純商品流通の考察のときに『鑄貨準備』あるいは『休職状態の鑄貨』として『單に形式的に規定』(『研究』Ⅱ八一頁「資本論研究」、至誠堂版三八〇ページ)されたものの具体化された姿に他ならない。つまり『鑄貨準備』として考えられたものは、資本の流通過程の考察においては『たえず更新しながら貨幣資本の形態において存在しなければならない資本部分』という形で再び現われて来る。そしてこの場合には、その大きさを規定する一定の法則が同時に明らかに『研究』Ⅱ八二頁(同上、三八〇ページ)されうる」(遠藤茂雄「貨幣の流通速度について——商品の變態速度を規定する諸事情——」、『大月短大論集』、創刊号三一～二ページ)内は引用者)。

久留間教授が「休職状態の鑄貨」とのべられているものは「鑄貨準備金」であり、「たえず更新しながら貨幣資本の形態において存在しなければならない資本部分」とのべられているもの、および遠藤氏が「この資本のうち常に貨幣形態で存在する部分」とのべられているものは、「蓄蔵貨幣の第一形態」を規定する購買手段および支払手段の準備金として「資本のうちつ

ねに貨幣形態で現存していなければならない部分」である。両氏の見解は、要するに、『批判』において「単に形式的に規定」されている「鑄貨準備金」は、資本の流通過程の考察においては「資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならない部分」という形でふたたびあらわれるということである。

このような見解について、二、三私見をのべておこう。

(1)『批判』において「鑄貨準備金」について最初にのべられているところは、第二章三貨幣(a)貨幣蓄蔵の項の第一パラグラフである。したがって、ここでは、まだ支払手段についての考察はおこなわれていなく、支払手段の準備金もまだとりあげられていない。「鑄貨準備金」は購買手段の準備金を意味するものではあるが、「鑄貨準備金」は支払手段の準備金をもあらわす概念であるというようには考えられない。

(2)「資本のうち常に貨幣形態で存在する部分」は、購買手段の準備金であるばかりでなく、支払手段の準備金でもある。「たえず更新しながら貨幣資本の形態において存在しなければならない資本部分」は、「鑄貨準備金」が「具体化された姿」であるばかりでなく、支払手段の準備金が具体化された姿でもなければならぬ。

(3)しかし、「たえず更新しながら貨幣資本の形態において存在しなければならない資本部分」という形で「鑄貨準備金」および支払手段の準備金がふたたびあらわれるといっても、この「たえず更新しながら貨幣資本の形態において存在しなければならない資本部分」という形であらわれる購買手段の準備金および支払手段の準備金は、単純は商品流通のもとにおけるたんなる購買手段の準備金、支払手段の準備金ではない。たんなる購買手段の準備金、支払手段の準備金は、資本制生産のもとにおいても所得の流通において存在しているが、「たえず更新しながら貨幣資本の形態において存在しなければならない資本部分」としてあらわれる購買手段および支払手段の準備金は、生産資本に再転形されるべき貨幣資本として存在しており、それは貨幣資本として機能している。したがって、それは単純な商品流通のもとにおける購買手段および支払手段の準備金のたんなる再現ではない。

(11)「かかる準備金としては、蓄積基金は、 $P \cdots P$ なる循環で考察された購買手段および支払手段の準備金(Fonds von Kauf- und Zahlungsmittel)とはことなる。購買手段および支払手段の準備金<sup>(5)</sup>は、機能している貨幣資本——時期をこにして継起的に機能をいとなむ諸部分からなる——の一部分である(したがって、過程中にある

資本価値一般の一部分の定在形態である。生産過程の継続中にたえず準備貨幣資本 (Reservegeldkapital) が形成される。というのは、きょう支払をうけとったが、こちらから支払うのは後日のこともあり、きょう多量の商品を買ったが、こちらで多量の商品を買うのは後日のこともあるからである。だから、このあいだ中流通資本の一部分 (ein Teil des zirkulierenden Kapitals)<sup>(9)</sup> がたえず貨幣形態で実存する」(『資本論』第二巻、S. 81、長谷部訳、青木版一二二頁)。

(5) 長谷部訳は、「購買または支払手段は……」となっており、向坂訳は、「購買または支払手段は……」となっている。いずれも意訳であり、原文は「Die letzten……」である。直訳すれば「後者は……」となる。後者というのは「Fonds von Kauf- und Zahlungsmittel」を充てつづるのであるから、意訳すれば、「購買手段および支払手段の準備金は……」となる。

(6) „ein Teil des zirkulierenden Kapitals“ は、長谷部訳では、「流動資本の一部分」となっているが、向坂訳では、「流通資本の一部分」、高島訳では、「流通中の資本の一部」となっている。カウツキーは、この箇所を註をつけて、「Zirkulierendes Kapital は、ここでは『流通にある』資本 („in zirkulation befindliches“ Kapitals) とおなじ意味である」(カウツキー普及版、第二巻、S. 54) とのべている。

この文章は、『資本論』第二巻 第一篇 第二章 生産資本の循環 第四節 準備金のなかにある文章である。

この文章のある節の表題となっている「準備金」、およびこの文章の冒頭にある「かかる準備金」というのは、資本の循環の攪乱を解決するための準備金という意味の「準備金」である。「蓄積基金」というのは、いうまでもなく、いまだ能動的資本に転化されていない蓄積されている剰余価値である。また「P……P なる循環で考察された購買手段および支払手段の準備金」とのべられているものは、(一) において考察した購買手段および支払手段の準備金である。さて、この文章においては、まず資本の循環の攪乱を解決するための準備金と購買手段および支払手段の準備金との相異がのべられている。

資本の循環は、「W—G」なる過程が正常的な限度以上に延長されて商品資本の貨幣資本への転形が異常に手間どる場合、あるいはまた「この転形が完了しても、たとえば、貨幣資本が転形されるべき生産手段の価格が循環開始当時の水準よりも騰貴している」場合（『資本論』第二巻、S. 80～1、長谷部訳、青木版一二二ページ）に攪乱される。このような資本の循環の攪乱は、資本の循環過程のなかにふくまれていて機能しつつある貨幣資本によっては解決することができない。したがって、資本の循環の攪乱を解決するための準備金は、資本の循環過程のなかにふくまれておらず、この過程の外部におかれていなければならない。

「蓄積基金」は、いまだ能動的資本に転化されていない剰余価値であり、資本の循環過程のなかにふくまれておらず、機能している貨幣資本ではない。したがって、それは資本の循環が攪乱された場合に、この攪乱を解決するために資本の循環過程のなかにはいりこむことができる。「蓄積基金」は、このような「特殊な副次的役割」を、つまり資本の循環の攪乱を解決するための準備金としての役割をはたすことができる。

他方、（一）において考察した購買手段および支払手段の準備金として存在する貨幣は、商品資本（W）から転形され、それにふくまれている剰余価値部分がさしひかれた生産資本に再転形すべき貨幣資本（G）であり、貨幣資本として機能している。したがって、この購買手段および支払手段の準備金として存在する貨幣資本は、資本の循環過程のなかにふくまれており、機能しつつある貨幣資本である。このような購買手段および支払手段の準備金として存在する貨幣資本は、資本の循環の攪乱を解決するためには役立ちえない。ところで、この資本の循環過程のなかにふくまれており、購買手段および支払手段の準備金として存在する貨幣資本は、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣である。だから、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、資本の循環の攪乱を解決するための準備金

として機能することはできない。

つぎに、この文章においては、「生産過程の継続中にたえず準備貨幣資本が形成される」ということがのべられ、そして、それがどのようにして形成されるかということがのべられている。

説明の便宜上、「きょう多量の商品を買ったが、こちらで多量の商品を買うのは後日のこともある」ということからみてみよう。「きょう多量の商品を買った」ということは、 $W' - G'$ であらわすことができる。商品資本が貨幣資本に転形されたわけである。ところで、この  $W' - G'$  によって手もとにはいつてきた  $G'$  には剰余価値部分  $g$  がふくまれている。この  $g$  は、資本家の個人的消費にあてられるか、または蓄積されるか、いずれにしても資本の再生産過程から排除され、分離される。したがって、 $G'$  から  $g$  がさしひかれた  $G$  だけが、生産資本に再転形されるべき貨幣資本となる。貨幣資本の生産資本への再転形は、資本の循環過程そのものの諸条件によって規定されているのであるが、ここでは「こちらで多量の商品を買うのは後日のこともある」というようにのべられている。したがって、このあいだ  $G$  は貨幣状態で休息していなければならないことになる。つまり、それは購買手段の準備金として生産資本にまだ再転形されないで貨幣資本の形態において存在する。ここでは、この購買手段の準備金としてまだ生産資本に再転形されない貨幣資本は、「準備貨幣資本」としてのべられている。つぎに、「きょう支払をうけとったが、こちらから支払うのは後日のこともある」ということについてみよう。「きょう支払をうけとった」ということは、以前に、きょう代金を支払うという契約で、 $W'$  (商品資本) を売っていたので、その代金の手もとにはいったということである。ここで、はじめて商品資本の貨幣資本への転形がなされる。この手もとにはいつてきた  $G$  も  $g$  がふくまれているから  $G$  から  $g$  をさしひいた  $G$  が生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能する。つぎの「こちらから支払うのは後日のこと

もある」ということは、すでに商品を一定の期日に代金を支払うという契約のもとで購買しているが、まだその支払期日にたっていないこともあるということである。だから、Gはその支払期日にたつするまで貨幣状態で休息していなければならない。それは支払手段の準備金として貨幣資本の形態において存在する。ここでは、この支払手段の準備金として存在する貨幣資本も「準備貨幣資本」としてのべられている。

以上の考察によって、この文章においては、購買手段および支払手段の準備金として生産資本にまだ再転形されないで、貨幣資本の形態において現存する資本部分が、「準備貨幣資本」としてのべられていることがわかる。そして、この購買手段および支払手段の準備金として貨幣資本の形態において現存する資本部分が、「蓄蔵貨幣の第一形態」なのであるから、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣が、ここでは「準備貨幣資本」としてとりあつかわれていることになる。

しかし、この文章においては、(一)の文章と同様に、資本がその一部分をつねに購買手段および支払手段の準備金として貨幣形態において現存していなければならない、ということの必然性についてはふれられていない。

以上、『資本論』第二巻第一篇第二章生産資本の循環のなかにある二つの文章を考察したが、この二つの文章においてのべられていることは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣についての叙述であると考えられる。しかし、この二つの文章においては、この「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣が、資本の循環過程においてどうしてつねに必然的に形成され、現存していなければならないのか、ということ、すなわち、この貨幣蓄蔵の必然性についてはのべられていない。いいかえれば、なぜ、資本はその一部分をつねに購買手段および支払手段の準備金として貨幣形態において現存していなければならないのか、ということとはあきらかにされていない。そこで、われわれは、つ

ぎにこの問題についての考察にはいなければならない。

### 三

第一節に引用した文章において、「蓄蔵貨幣の第一形態」については四つの点のべられていた。これらの諸点のうちもっとも重要なものは(1)である。それは、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣はいかなる蓄蔵貨幣であるか、ということの規定しているからである。(1)においてのべられていることは、「蓄蔵貨幣の第一形態」とは、支払手段および購買手段の準備金として「資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならない部分」であるということである。この規定によって、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、いかなる蓄蔵貨幣であるかということがあきらかにされる。第二節において検討した『資本論』第二巻の二つの文章が、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣についての叙述であると考えるのは、この(1)における規定にもとづいてである。ところが、第一節において引用した文章においても、また第二節において引用した二つの文章においても、なぜ、資本は、つねにその一部分を支払手段および購買手段の準備金として貨幣形態において現存していなければならないのか、いかえれば、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、なぜ、資本の循環過程において、つねに必然的に形成され、現存していなければならないのか、という必然性についてはふれられていない。だが、第一節においてのべたように、この問題をあきらかにしておかなければ「蓄蔵貨幣の第一形態」を充分に理解しえたことにはならないであろう。

「蓄蔵貨幣の第一形態」を規定する「貨幣形態で現存する」資本とは、いかえれば、貨幣資本の形態にある資本

のことである。貨幣資本といっても、ここでの貨幣資本は、資本の再生産過程から排除され、分離されている貨幣資本、「遊休し目さき失業している」貨幣資本、潜在的貨幣資本とはことなる。ここでの貨幣資本は、資本の循環過程にふくまれ、生産資本に再転形すべく機能している貨幣資本である。では、なぜ、この機能しつつある貨幣資本が、資本の循環過程においてつねに現存していなければならないのか。

周知のように、資本の「規定的目的・推進的動機」は、価値増殖である。価値増殖が連続的、恒常的におこなわれることによって、はじめて資本はつねに資本であることができる。この価値増殖がおこなわれる過程は生産過程においてである。したがって、価値増殖を連続的、恒常的におこなうためには、資本がつねに資本であるがためには、生産過程が連続的におこなわれていなければならない。

ところで、資本の総循環過程は、生産過程と流通過程とを交互にくぐりぬけていく過程であり、したがって、それは生産過程と流通過程との統一としてあらわれる。資本は、このような循環過程において、貨幣資本、生産資本、商品資本という三つの形態をつぎつぎにとつてはぬぎすてる。貨幣資本とは、労働力と生産手段との購入にあてられるべき貨幣の形態をとつて存在する資本である。生産資本とは、生産過程において資本として価値増殖機能をはたしている労働力と生産手段との形態で存在する資本であり、それは、貨幣資本の転形したものにほかならない。商品資本とは、商品の形態をとつて市場に存在する資本のことであつて、それは、生産資本の機能の結果としてつくりだされ、市場においてふたたび貨幣資本に転形されることを待ちうけている資本である。このような三つの形態をとつてはぬぎすてる過程、すなわち、商品資本の形態から貨幣資本の形態へ、貨幣資本の形態から生産資本の形態への転形の過程が資本の流通過程である。資本の総循環過程は、生産過程と流通過程とを交互にくぐりぬけていく過程であるから、



資本の直接的な生産過程は、資本の循環過程の一つの環をなすにすぎない。だから、生産過程がたえず反復され、連続的におこなわれうるためには、流通過程において資本の転形（商品資本の貨幣資本への転形、貨幣資本の生産資本への転形）がたえず円滑にすすんでいることが前提条件となっている。流通過程において資本の転形がたえず円滑におこなわれるということは、商品資本（ $W'$ ）の貨幣資本（ $G$ ）への転形、つまり  $W' \rightarrow G$  が時期をことにしてたえず継続的におこなわれるということ、また貨幣資本（ $G$ ）の生産資本への転形が時期をことにしてたえず継続的におこなわれることを意味する。したがって、資本はたえず更新されながら商品資本の形態を、また貨幣資本の形態を流通過程においてとっていなければならない。もし、 $W' \rightarrow G$ （商品資本の貨幣資本への転形）が停滞すれば、すなわち、商品が販売されえなかったならば、循環は中断され、 $G \rightarrow W$   $\swarrow$   $P_{mA}$  による労働力および生産手段の填補がおこなわれえず、こうして生産は制限され、全過程が停止される。また、 $W$  が販売されても、 $G \rightarrow W$   $\swarrow$   $P_{mA}$  が市場における外的事情によって停止せざるをえないとすれば、すなわち、商品資本が貨幣資本に転形されても、貨幣資本の生産資本への再転形がおこなわれえないとすれば、これにつづく生産過程をおこなうことができない。さらにまた、生産過程が休止すれば、販売されるべき商品資本が存在しなくなるであろう。このように資本の循環過程が連続的、恒常的におこなわれるためには、 $W' \rightarrow G$ 、 $G \rightarrow W$  および  $P$  のそれぞれの段階が円滑に継起しておこなわれ、資本は貨幣資本、生産資本、商品資本の三つの形態に分割され、それらが同時にたえず更新されながら空間的に配列され、したがって、それぞれの資本の循環、つまり貨幣資本の循環（ $G \cdots G'$ ）、生産資本の循環（ $P \cdots P$ ）、商品資本の循環（ $W' \cdots W$ ）が同一の資本の内部において統一されていなければならない。だから、資本は全体としては、たえず更新されながらも、たえずこれらの三つの形態（貨幣資本、生産資本、商品資本）において存在していなければならない。すなわち、

資本の一部分が生産過程にあって生産資本の形態にあるとき、資本の他の一部分は販売市場にあって商品資本の形態にあり、資本の第三の部分は生産の準備段階として潜在的生産資本の形態にあり、また資本の第四の部分は生産要素への再転形、いかえれば生産資本への再転形を準備している貨幣資本の形態にある。

貨幣資本は、この資本の循環過程においては、商品資本から生産資本への再転形を媒介する資本の定在である。貨幣資本は生産資本に再転形すべき資本価値であり、いまだ生産資本への再転形をおこなっていない貨幣状態にとどまっている資本価値である。貨幣資本は、 $W' - G'$ の結果としてたえず継起的に形成される。 $G'$ には剰余価値部分 $g$ がふくまれているが、この部分は、資本家の個人的消費にあてられるか、あるいは蓄積されるか、いずれにしても資本の再生産過程から排除され、分離される。したがって、生産資本に再転形されるべき貨幣資本は、 $G'$ から $g$ をさしひいた $G$ である。一方では、このように生産資本に再転形されるべき貨幣資本が、 $W' - G'$ の結果としてたえず継的に形成されるが、他方では、貨幣資本の生産資本への再転形は、資本の循環過程そのものの諸条件によって規定されて、たえず時期をこにして継起的におこなわれる。 $G - \frac{W}{P_m A}$ という行為をおこなった貨幣資本は、みずからの形態をぬぎすてて生産資本の形態に再転形される。こうして、資本の一部分は、つねに、たえず更新されながら、すなわち、それを構成する個々の貨幣片をたえずかえながら、貨幣資本の形態において現存する。そして、つねに、たえず更新されながら生産資本の形態、商品資本の形態において現存する各資本部分とあいならんで、資本の一部分が、たえず更新されながら貨幣資本の形態において現存することが、資本のたえまざる循環運動をおこなうための、生産過程を連続的、恒常的におこなうための、資本がつねに資本であるがための不可欠の前提条件をなしている。

したがって、資本は、つねにその一部分を貨幣資本の形態において現存していなければならないのである。

さて、資本のうちつねに貨幣状態において現存している貨幣資本は、生産資本への再転形をおこなうべき資本価値ではあるが、まだ生産資本への再転形をおこなっていない、その準備の段階にある。第二節においてのべたように、貨幣資本は、貨幣の諸機能以外になんらの機能をもはたすことはできない。 $G - W \begin{smallmatrix} \diagup \\ Pm \\ \diagdown \end{smallmatrix} A$  という行為をおこなう場合には、貨幣資本は、購買手段あるいは支払手段の機能をはたす。そして生産資本への再転形をなしとげる。 $G - W \begin{smallmatrix} \diagup \\ Pm \\ \diagdown \end{smallmatrix} A$  という行為をおこなっていない貨幣状態にとどまっている貨幣資本は、購買手段あるいは支払手段の機能をおこなう状態にはあるが、現実には購買手段あるいは支払手段として能動的に機能していない。だから、それは購買手段あるいは支払手段として機能することを準備している段階にある。つまり、それは、購買手段および支払手段の準備金として存在している。「資本のうちつねに貨幣形態で現存していなければならない部分」が、購買手段および支払手段の準備金として存在するというのは以上のような意味である。ところで、購買手段および支払手段の準備金として休息状態におかれている貨幣は、一時的にせよ流通からひきあげられている。したがって、それは蓄蔵貨幣の形態にある。ここでは、貨幣資本が、 $G - W \begin{smallmatrix} \diagup \\ Pm \\ \diagdown \end{smallmatrix} A$  において購買手段あるいは支払手段として機能するのと同様に、貨幣資本は蓄蔵貨幣という貨幣機能をはたす。逆にいえば、ここでは、購買手段および支払手段の準備金として一時的に流通からひきあげられている蓄蔵貨幣は、生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能しているのである。

以上の考察によって、なぜ、資本はつねにその一部分を購買手段および支払手段の準備金として貨幣資本の形態において現存していなければならないか、ということがあきらかになったであろう。そして、この資本のうちつねに購買手段および支払手段の準備金として現存していなければならない貨幣資本が、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣である。したがって、「蓄蔵貨幣の第一形態」にぞくする蓄蔵貨幣は、資本の循環過程において必然的に形

成され、つねに現存していなければならないのである。

以上、本稿においてのべた叙述からすでにあきらかなように、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣ないし「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣を形成する貨幣蓄藏については、つぎのように規定することができるであらう。

(1) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、資本の循環過程において必然的に形成され、つねに現存していなければならない。したがって、「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣を形成する貨幣蓄藏は、資本の循環過程において必然的につねにおこなわれなければならない。

(2) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、一時的に流通からひきあげられており、購買手段および支払手段の準備金として貨幣資本の形態にあり、資本の循環過程のなかにふくまれていて、資本の循環の他の諸段階との関連によって生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能している。

(3) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、「準備貨幣資本」である。

(4) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、資本の循環過程において必然的に形成され、つねに現存していなければならないが、それは「たえず流動するのであって、たえず流通に流れこみ、たえず流通から帰ってくる」、いいかえれば、たえず更新されている。したがって、それを構成する個々の貨幣片はたえずかわっている。

(5) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣を形成する貨幣蓄藏は、資本の循環過程において必然的につねにおこなわれ、それは「流通によって且つ流通のために規定された」貨幣蓄藏であり、「流通のためおよび流通に

よって条件づけられた貨幣蓄藏」である。

(6) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、資本の循環過程のなかにふくまれており、生産資本に再転形すべき貨幣資本として機能しているから、資本の循環の撓乱を解決するための準備金として機能することはない。

(7) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣を形成する貨幣蓄藏は、単純な商品流通のもとにおいて一般的、支配的におこなわれる「自立的な致富形態としての貨幣蓄藏」とはことなる。

(8) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、単純な商品流通のもとにおいて購買手段および支払手段の準備金として形成される蓄藏貨幣そのものとは区別して考えなければならない。

(9) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣を形成する貨幣蓄藏は、「流通過程の進行が障碍にぶつかってGが市場状態などの外的事情によりG—Wなる機能を停止せざるをえず、したがって、長かれ短かれ貨幣状態にとどまる」(『資本論』第二卷、S.73、長谷部訳、青木版一〇二頁)場合に生じる「非自由意志的貨幣蓄藏」とはことなる。「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣を形成する貨幣蓄藏は、「自由意志的」、「合目的」、「合機能的」な貨幣蓄藏である。

(10) 「蓄藏貨幣の第一形態」にぞくする蓄藏貨幣は、したがって、「遊休し目さき失業している」貨幣資本ではないから、「蓄藏貨幣の第二形態」にぞくする蓄藏貨幣ではない、ということはいうまでもない。

(一九五九年二月)